

2019年3月31日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「十字架を誇る」

聖書：ガラテヤの信徒への手紙6：11～18

パウロは「十字架を誇る」と言う。パウロが見ている「十字架」とは、単に罪の赦しを得る神の救いの象徴としてあるのではなく、「十字架」には「苦しみや悲しみ」といった更なる広がりがあることを示している。

パウロは「この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです」と言う。このことは何を意味しているのか？ ここはいわゆる現在完了形になっている。イエスのあの十字架の出来事とは、過去のままで終わっているのではなく、過去の出来事が、“いま”と関わっている、“いま”の私と関わっている、“いま”の私と関わろうとしている…ということ。ゆえに「十字架」は、単に罪の赦しを得る神の救いの象徴としてあるのではなく、「十字架」には、現在の苦しみや悲しみ、いま、あなたに起きている辛い現実の只中に、イエス・キリストの十字架はあるということになる。そしてあなたは、いまのイエス・キリストの十字架とどう関わろうとしているのかと問う。

山之口獺の詩に「座布団」がある。「土の上にゆかがある／ゆかの上にはたたみがある／たたみの上にあるのが座布団で／その上にあるのが楽という／楽の上にはなんにもないのであろうか／どうぞおしきなさいとすすめられて／楽にすわった さびしさよ／土の世界をはるかにみおろしているように／住みなれぬ世界がさびしいよ」

この世は、楽な座布団の上に座って、土の世界をはるかに見下ろして、自分の都合の良いように物事を進める世界であるように思える。先日、ジュゴンが死んだ。辺野古新基地建設の影響がないとは言えないだろう。世界に誇れるはずの辺野古の海を埋め立て、世界に恐れられる軍事基地を造ろうとする日本政府。今の防衛大臣も、菅官房長官も、安倍総理も辺野古に一度も来たことが無く、楽な座布団の上に座って、土の世界を、辺野古の海を、はるかに見下ろして物事を進めている。このことが如何に罪深いことか。ジュゴンの死は、イエスの十字架の死に繋がる。この世に苦難の現状がある限り、イエス・キリストは今なお、十字架のはりつけにされているということである。

今の苦難の現状に向き合うことは、「十字架を誇る」ということになるのであろう。私たちは何を十字架として向き合っている者か。(神谷)